



ADULT ONLY







ク
イ

MUGENSAKUYA

乃藤悟志



ガッ
ガッ
ガッ

って
あれ？

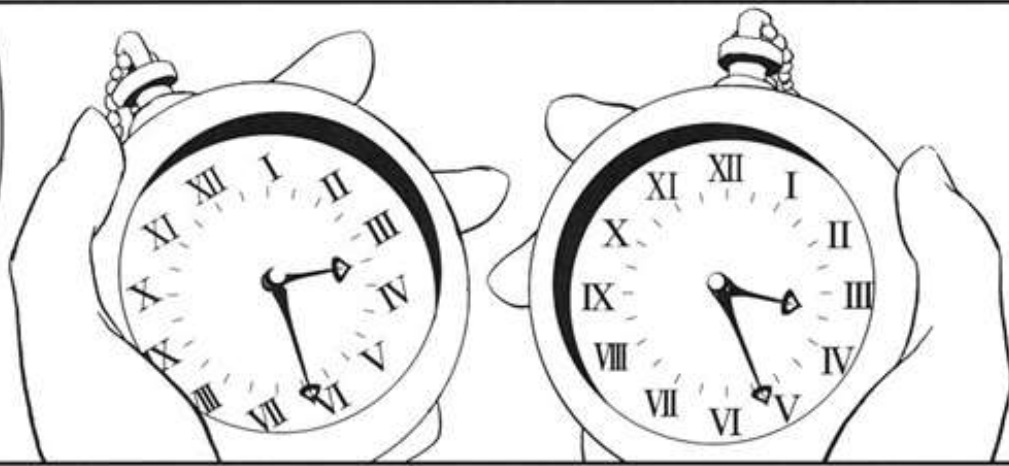
……美鈴

え？別に
いつもの——

このお酒——？



なるほどね



え？え？
どーゆー
コト
ですか!?

こっちは
過去の私

私自身が
デフレーション
ワールド状態に
なってるのね

能力が
暴走してる—
原因はおそらく
このお酒ね

誰かが
お酒を
飲んだ

まあ私自身にしか
影響はないし

効果も一時的な
ものらしいから
大事には至らないと
思うけど—

馬鹿ね

そんなの
自分同士で面倒を
押し付けあう
不毛な争い
なるだけじゃない

この場合の
正解は—

……なら
いいんですけど

でも自分が
二人いるなんて
ちよつと便利
ですよ

一人は仕事して
もう一人は
昼寝とか—

ち

わ

え、
一つのことを
二人の自分で
共同作業する——よ



プルン



唇と乳首を同時に吸われるなんて私がいけないでしょ？

ふふ……どう？

ちゅっ

もみもみ



ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ



あらもう欲しくなっちゃった？

はい♡



はっ……

でも

お尻に……カタイのが……熱いのが……

あ

じゃあ
挿れて
あげるっ

ひああ
ああん♡



まったく………たいして
いじってもいないのに
膣内ドロドロよ？

ほら
こっちの私のも
お願いね？

あん♡





んあ……♡
それ……♡



はあ……♡
おちんちんの熱いので
おっぱいから伝わって
きます……♡

むっ♡

アッ♡



もう……早いですよ

このおちんちんの生える魔法
一回射精したら
消えちゃうんでしょ？



射精る♡♡

アッ♡



大丈夫よ

私はまだまだ
たくさんいるん
だから……♡



え……
あ……♡

咲夜さんが
いっぱい♡
……♡



本格的に能力が
暴走してきた
みたいね

んッ♡

でもこれなら
思う存分あなたを
あげられるわね

!!

♡♡

きゅん

ダッ
ッ



ユモモ
忘れずに♡

あ♡

ドクドク

まっ♡



でもこんなに大勢で
美鈴が持つかしら？

大丈夫ですよ……
体力には自信ありますし

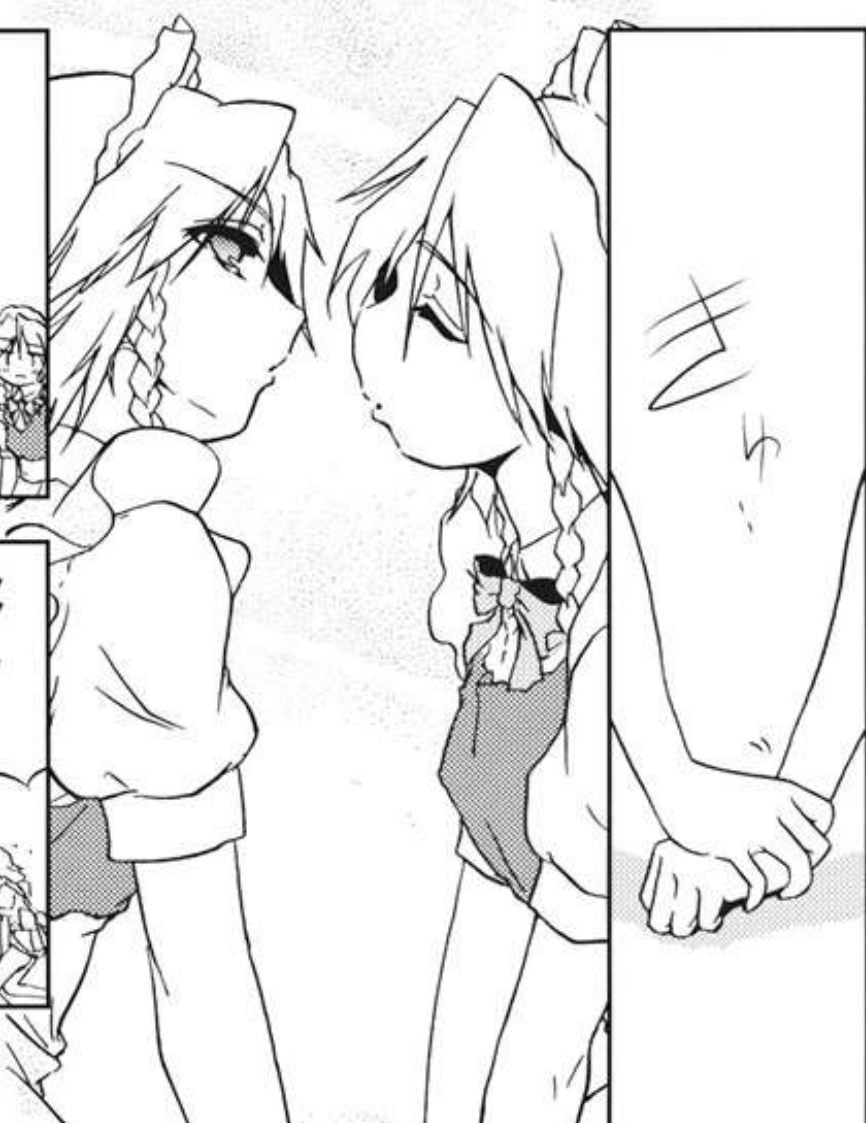
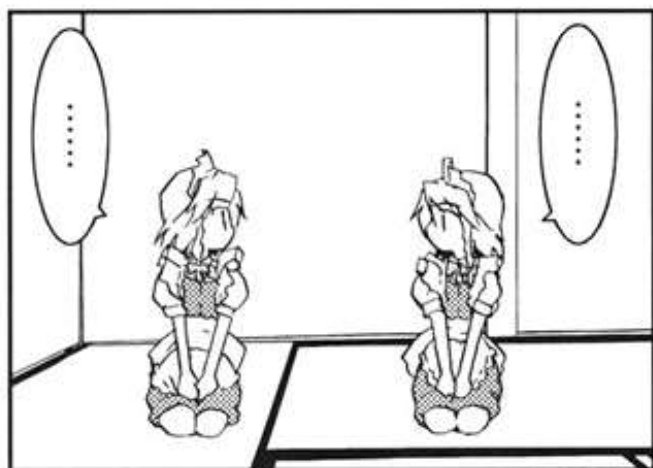
それに私も

とっても
キモチいいんです
……♡

はい

クツ

ユモモ





ああもう この際
美鈴の身体なら
どこだっていいわ!

やあん
背中あ……っ

あんど

しゅん
しゅん
しゅん



ああ……

あんど……

こんなにとくさんの
咲夜さんが

みんな私と
えっちしたがつてる

お嬢様になんて
できないんだ
から――

こんなこと
私にしか――

あはあ
ああん

ギョッ

アム...

ぐわっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ



だから咲夜さん
もっと私を――

もっと♡
もっとお♡
咲夜さんっ♡♡

いい……
いいよお……っ♡

咲夜さんが全部
のお……っ♡♡♡



はあ……っ♡♡
すっごいわよ美鈴
さつきからきゅんきゅん
締めつけて……っ♡♡♡♡

も……ダメですっ
咲夜さん……

きゅんきゅん……♡♡♡♡
すっごいわよ美鈴

グハッ

グハッ

グハッ

ガッ









いつか、

彼女が見る夢

0005

イラスト：星乃だ一つ

「汝、十六夜咲夜は紅美鈴を妻とし……」

「え……な、何これ……？」

ステンドグラスから差し込む七色の光。そして白亜の壁に掛けられた大きな十字架、外の世界で広く崇拜されている『神』の代理人の彫像。さらには足元に赤い絨毯。私は教会のような場所にいた。

——幻想郷に教会などあったらどうか。

——そして何故私は教会などにいるのだろうか。

——何より、何故『結婚式』なのだろうか……？

「健やかなる時も、病める時も、その身を共にする事を誓いますか？」

「ちよつと、ちよつと霊夢！あなたそんな格好で何やってるのよ!？」

目の前には私がよく知る人物、霊夢がいる。だが彼女のいでたちは、見慣れた巫女服とは遠くかけ離れていた。地面まで付きそうなほどに長い黒のジャケットは、巫女というよりは神父を思わせる。

もしかしたらジャケットの下はいつもの巫女服なのかも知れないが、それを確かめる為とはいえ少女

を押し倒すような趣味は私にはない。

「ん？一応それでも聖職者だしね。洋の東西の違いはあるけど、まあそれは置いて」

「いやあなたがやってる事じゃなくって！なんで私が美鈴と……！」

私の隣には美鈴がいる。私と目が合っているものように微笑みかけてはくるが、彼女のいでたちもまた普段見慣れぬものだった。純白のドレスに身を包み、同じく純白のベールで燃えるような紅い髪に薄化粧を施している……そう、いつどこで仕立てたのかは知らないが、彼女が纏っているのは誰がどう見てもウェディングドレス以外の何者でもなかった。

そして私もいつものメイド服ではない。黒無地のジャケットにズボン、そして蝶ネクタイ。着替えた覚えなど全くないのだが、私はいわゆるタキシードに身を包んでいた。どうやら武器として携帯しているナイフも今は手元にないらしい。この状況で使う事はまずないだろうが、なければいけない何か手持ち無沙汰を感じてしまう。

「その身を共にする事を誓いますか？」

「答えなさいよ霊夢」

「その身を共にする事を誓いますか？十六夜咲夜」

「先に私の質問に答えて」

「その身を共にする事を誓いますか？」

「………」

状況を把握していない者に対しては誰かが詳細な解説をしてくれるのが筋という物なのに、どうやら霊夢は私の言葉に聞く耳を持たないつもりらしい。同じ問いかけを何度も繰り返して、よほど私の首を縦に振らせたいらしい。

「あなたが『はい』って言うまで終わらないけど」

「……！」

「咲夜さん、私たちこれから結ばれるっていうのにそんな恥ずかしがる事ないじゃないですか」

「め、美鈴!?あなたはこの状況に何の疑問もないの!？」

「疑問?何もありませんけど?」

再び美鈴と目が合い、同じように美鈴は屈託のない微笑みをかけてきた。普段は快活な印象しかない彼女なのに、こう言っては失礼だが今の彼女はおしとやかで大人の女性と形容するに十分すぎるほど相応しい。取り乱している私なんかよりよっぽど潇洒と呼べるだろう。

「さあさあ、気を取り直して。続けるわね」

「……どうなってるつてのよ……!」

しかし、この状況は分からない。なぜ私と美鈴が結婚する流れになっているのだろうか?なぜこの場には私と美鈴、それに霊夢しかいないのだろうか?

霊夢は私の問いにはまともに取り合ってくれないし、美鈴に聞いてもまともな答えは得られないよう

な気がする。

「……ここはしばらく場に流されてみれば真相が分かるのかも知れない。私としては甚だ不本意だけど。」

* * *

「汝、十六夜咲夜は紅美鈴を妻とし、その健やかなる時も、病める時も、富める時も、貧しい時も、その身を共にする事を誓いますか？」

「……はい、誓います……」

「こうでも言わなければ霊夢は納得しないのだから、霊夢の顔が妙にニヤついているように見えるのは果たして気のせいだろうか？」

「では汝、紅美鈴は十六夜咲夜を夫とし、その健やかなる時も、病める時も、富める時も、貧しい時も、

その身を共にする事を誓いますか？」

「……はい、誓います♪」

「（なんであなたはノリノリなのよっ）」

まるでこうなる事が当たり前であるかのように、美鈴は満面の笑みで霊夢の問いに答える。確かに彼女の笑顔は爽やかでかわいらしいけど、今この状況では流石に不自然に見えてしまう。この状況に酔っているだけなのか、それとも霊夢とグルに……？

まあ、流石にそれはないだろうけど。

「よろしい。では、指輪の交換を」

「……どうせ、これもやらなきゃ駄目なんでしょ？」

「当然」

霊夢から指輪が差し出された。指輪交換の作法くらは私も知っている。美鈴の薬指に指輪をはめ、



今度は美鈴が私の薬指に……指輪を上手にはめてくれた。なぜ、この指輪は美鈴にはともかく私の指にもピッタリ入るのだろうか？このタキシードもそうだけど、誰にも採寸などさせた事はないというのに。

「えへへ……似合ってますよ、咲夜さん」

「……あなたもね、美鈴」

「あは……咲夜さん♪」

「……」

いちいち微笑みかけてくる美鈴は確かにかわいいけど、流石にそろそろしつこいような気がしてきた。普段の彼女はここまで私に甘えたりはしない。「上司と部下」という関係を彼女なりに意識しているだろうから、公私の私においてもその関係を多少なりとも持ち込む筈なのである。だから場の空気に酔っているとしてもこの甘えっぷりはありえない……

しかし、そんな瑣末な事はどうでもいいと思えるほど、今の美鈴のかわいらしさは間違いない本物なのだ。気がつけば彼女に見落れている自分がいて、嬉しいような恥ずかしいような。

美鈴から見た今の私はどう映っているのか——も、ほんのちよっぴり気にはなる。

「……それでは、神の御前で二人が夫婦となる事の証を見せなさい」

「……それってつまり……？」

「さあ、誓いの口づけを！」

「は、はあ!？」

言うとは思っていた。まがりなりにも結婚式をやっている以上、ここに至る事は十分予想できていた。

しかし実際に宣言されると……やっぱり、どうしても焦ってしまう。これは『こつこ』ではないというわけだ。霊夢のテンションが無駄に高いような気がするのは何故だろうか？それに、その顔がやけにニヤついて見えてしまう。気のせいとは思えない。

焦りと恥ずかしさで顔がどんどん熱くなってくるのがよく分かる。そしてそんな私に追い討ちをかけるように、霊夢がニヤついた顔を向けてきた。

「これから結ばれるのよあんた達？こんな事で恥ずかしがってちゃ駄目」

「いやだからそういう問題じゃないって言ってるでしよう!？」

「ほら、新婦の方は立派なものよ。見てみなさい」

「咲夜さん……」

促されて横に目をやれば、そつと唇を向ける美鈴の姿。薄紅を乗せた唇は瑞々しい艶を放ち、そのまま吸い込まれてしまいそう。男ならこの唇だけで迷わず美鈴を受け入れてしまうだろう。

……いけない。例え美鈴がノリ気でも、女の子同士でこんな事……でも美鈴の唇、とても柔らかそう……
……でも、やっぱり……

「いっ……」

「嫌だばああああああああああああああああつ!!」

……………

「……あれ？」

白塗りのシミ一つない壁。派手さはないが、決して安物でもない家具の数々。そして一秒の狂いもなく時を刻み続ける柱時計。ここは、紛れもなく私の部屋だ。ベッドの心地よい感触、誰もが味わうであろうこの気だるさは間違いなく現実の物。どうやら夢を見ていたらしい。

「……あ、ゆ、夢か……そうよねえ……」

ベッドの上で記憶を整理する事暫し、どうにか私は話の流れを掴む事ができた。『結婚式を挙げる夢』を見たのなら、なるほど突飛な展開も不可解な事象も『夢だから』で納得する事ができる。

なぜこんな夢を見たのか……という疑問もあるにはあるが、生物の深遠なる脳で生み出された物の全てを後付けの理性と知性で全て理解できるとは思っていない。『そういう夢を見た』、それだけが確実に信じられる唯一の事実なのだ。

盛大な悲鳴を上げてしまったようだが、時を止めて眠っていたのがせめてもの救い。何にせよ過ぎた事だと割り切つて、朝の支度を始める事にした。

「あ、咲夜さんおはようございます」

「あ……くあwせd r i f t l e g y f u j i c o o p !」

「ひ、ひええええええええええ!!?」

「……あ」

やつてしまった。

着替えを終え、まずは館周辺に異常がないかどうかのチェック。館の周りを歩いていけば必然的に美鈴と出くわしてしまうわけで……気がついた時には、私の両手にはナイフが握られていた。過ぎた事と割り切つたはずなのに、やっぱり心のどこかで割り切れていない。

切り刻んだ相手がお嬢様でなかったのが不幸中の幸いといった所だろうか。

「イタタ……い、いきなり何ですか咲夜さん……」

「わ、悪かったわ……いきなり出てくるからビックリしちゃったのよ」

「ふうん……まあ、襲われたのが私でよかったですけど」

たった今痛い目に遭つたばかりだというのに、いつものスマイルで応える美鈴。回復能力だけは異常に高いのが彼女の持ち味だけど……とりあえずあんな夢を見た後とあっては、美鈴の顔をまっすぐ見る事ができない。ピントのずれたカメラのように、私の視線は常に美鈴の少し横。

もしかしたら美鈴が訝しむかも知れないけど、見れないものは見れないのだからしょうがない。

「ところで咲夜さん、私すごい夢を見ちゃったんですよ」

「へ、へえ……どんな夢……?」

「なんでかは知らないんですけど、私と咲夜さんが結婚する夢なんです!」

.....

「ぶほウ!!?」

「あ、やっぱり驚いた〜」

それはもう、驚くに決まっている。双子が同じ夢を見ることもあるという話は聞いた事があるが、私と美鈴は双子でも姉妹でもないしそもそも種族からして全く違う。精神構造さえ違うはずなのだからそんなシンクロニシティが起こる事は殆どありえない筈なのに……

「それでですね、霊夢さんが神父さんみたいな事をして、ちょうどキスする所で目が覚めちゃって……キヤッ!」

「あは……はは……」

「もしもそこで目が覚めなかったら……私と咲夜さんでキス」

.....

「あれ? 咲夜さん?」

ブツチン

「くあwせdriftgyふじこーp@s%」

#!!!!!!

「ひえええええええええええ!!!!??」

「忘れろ! 忘れろ! 忘れろ! うわあすううるえええるおおおおっ!」



「ひでぶ! あべし! たわば!! うわらば!! なにをばら!!」

今度は自覚があった。美鈴の言葉で顔が一気に熱くなり、頭の中は痺れて真っ白になっていく感覚が確かにあった。しかし美鈴の言葉と笑顔だけは妙に脳裏に焼きついていて、ただ一心不乱にナイフを投げ、或いは振り下ろし、薙ぎ……投げたナイフの軌跡も、薙いだナイフの剣閃も、全て覚えていく。

「はあ……はあ……ば、馬鹿っ……!!」

そして、時間にして一分と経ってないだろうか。

剣山のような姿に変わり果てた(すぐに復活するだろうけど)美鈴を足元に、私の息と胸の鼓動は荒々しいものだった。

急に激しい動きをしたから……というだけではない。それは自分が一番分かっている。あんな話を突然振られれば、誰だって慌てだすに決まっているのだ。

「馬鹿……馬鹿……馬鹿美鈴……!!」

顔が熱いのは美鈴のせい。

動悸が治まらないのも美鈴のせい。

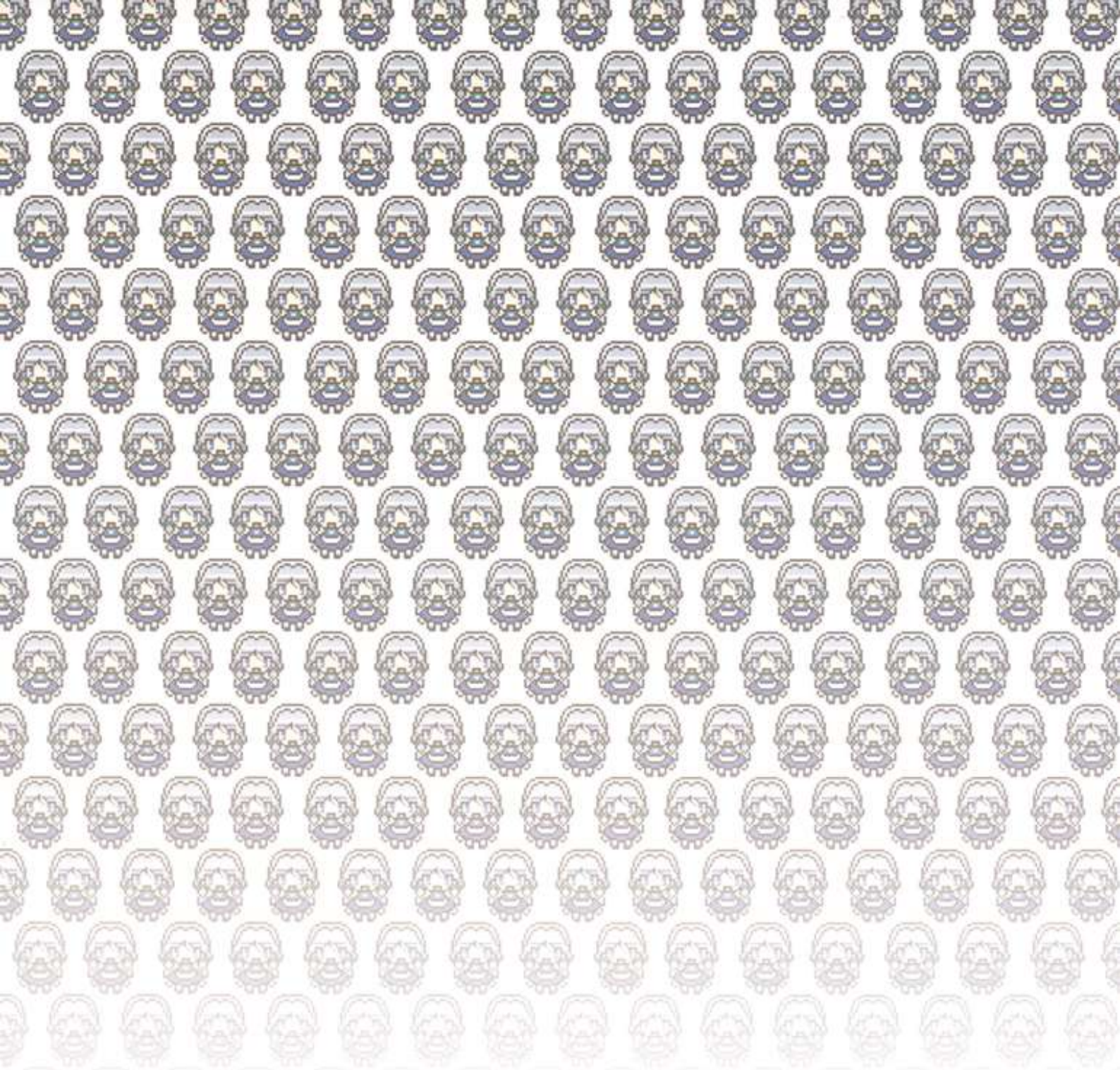
私がこんな事をしたのも、当然美鈴のせい。

でも、こんな美鈴から視線を外せないのは……?

「本当に……馬鹿なんだから……」

もう手持ちのナイフはない。あっても、これ以上美鈴に向ける気は毛頭ない……ならば、私のこの手は、美鈴に差し伸べてやる事しかできなくて。

(終)



対象年齢18歳以上

